

## 雨の鈴鹿を走破せよ

この物語は、2012年6月16日（土）、鈴鹿サーキットで行われた「ホンダエコマイレッジチャレンジ」に参加した三人の高校生たちの奮闘と成長の記録である。

彼らの名は「パイナップルボーイズ」

1リットルで何キロ走れるか！

8周17.616キロ、平均時速25キロ（42分12秒07以内）で走り、燃料の消費量から1リットル当たり何キロ走れたのか、燃費を競うレースである。

いつものように雨が降っていた。レーサーたちを試すかのように、毎年この日は雨になる。

高校生クラスは44チーム、まず、制動能力検査でふるいにかけてられる。鈴鹿の急な下り坂を規定の制動距離で止まれるかどうかのブレーキテストだ。多くのチームが止まり切れず停止ラインを越えてしまう。何度も再検査を行い。行列は途切れることがない。車体をカップで覆いマシンをいたわる。「止まれるだろうか」、車輪を拭きながら誰かが言う。沈黙のあと、「だいじょうぶ」と別の誰かがいった。「頼むぞ、ドライバー」、ドライバーは全力でブレーキを握りしめた。「合格！」検査員の声が響いた。「次は車体検査だ」思わず笑みがこぼれた。

鈴鹿の車検は厳しい。レースに耐えられる車体になっているか。オイル漏れはないか。

「オイルがたれます。」「不合格です。」

「どうして・・・」「おれたちのレースはここで終わってしまうのか」三人から笑顔が消えた。

チェーンに塗布したオイルが、雨によって流されコースにまいてしまう可能性があるからだった。車検終了時刻まであと5分、絶望的だった。

「お願いします。なんとかありませんか」引率の先生の一人が言った。

「ぎりぎりまで待ちます。カバーを追加してください。」三人のまなざしが真剣になった。

ピットに引き返し相談を始めた。そのとき、「ちょっと行ってくる」一人の先生が動いた。

何もできないまま30分が過ぎた。レースは待ってくれない。ドライバーズブリーフィングの館内放送がながれた。レース規則の確認のためドライバーは必ず参加しなければならない。「ドライバー、とりあえず行くぞ。」先生の一人とドライバーはピットを離れた。

「買ってきたぞ、これでなんとかしろ」袋の中は、厚紙とガムテープ、そして水の入ったペットボトルだった。

「どうやるんですか」三人は言った。「自分たちで考えろ」先生が言った。

早朝で開いていたのはコンビニだけだった。「水を捨てて、半分に切れ」先生が言った。三人にイメージが伝わった。「プラ板はない。厚紙にガムテープを貼れ」厚紙はガムテープによって補強と撥水加工が施された。「いける」そこにいた全員が思った。作業が機敏になった。

「エンジンをかけろ」「ドライバー準備しろ」「車検に合格したら、そのまま、練習走行に入るぞ」先生が言った。

すでに練習走行が始まっていた。まだ鈴鹿のコースは一度も走ったことがない。練習走行なしでレースに出ることなど考えられなかった。みんな焦っていた。

「合格！」三人のまなざしは真剣なままだった。「41番ゲートへ急げ」「無線機のチャンネルを合わせ

ろ」「ストップウォッチを用意しろ」先生の指示が飛ぶ。

初めての鈴鹿、ドライバーの緊張は計り知れない。原付すら乗ったことがない。学校で初めて運転した時は緊張で震えが止まらなかった。「やるしかない」ドライバーは腹をくくった。

「一周目はエンジンを切るな」「コースの感触を確かめろ」先生の指示にドライバーはうなずいた。鈴鹿の第二コーナーを過ぎると急な登りとカーブの連続だ。失速してしまうと二度と発進できない。燃費を重要視するため発進用の低速ギヤはない。コース上で停止してしまった車両は練習走行が終わるまで回収してもらえない。つまり、その時点で練習終了となる。「次は下りでエンジンを切れ」無線でドライバーに指示した。「三周でピットインしろ」エンジンから湯気が出ていた。「エンジン切ったのか」先生からげきが飛ぶ。「オーバーヒート寸前だ。ピットへ戻れ」、ドライバーは未熟だった。このままではレースにならないと先生は思った。

「エンジンへ注油をしろ、もう一度行くぞ」「ドライバー、本番と同じように走れ、失速に注意しろ」ドライバーはまだ自信がなかった。「ラップタイムが速すぎる。もっとゆっくり走れ」たった三周で大量の燃料を消費していた。11時30分の練習走行締め切り時刻が迫っている。「もう一度いくぞ、ピットインしたらそのまま41番ゲートへ迎え」先生の賭けだった。練習走行締め切りの放送・・・、間に合った。

「よし、これでいける」先生は確信した。ドライバーは他のドライバーの後ろについて走りライン取りを研究していた。

レースが始まった。一周目、「6分15秒、遅すぎる。ペースを上げろ」無線からの指示にドライバーは冷静だった。周回を重ねるごとに徐々にペースを上げていった。「いいぞ、そのペースだ」ドライバーはペース配分ができるようになっていた。失速、リタイヤが続出し始めた。ドライバーは思った。「フルカウルのマシンに負けてたまるか」無骨なマシンと自分とが重なった。「八周を走りきらなければ意味がない」「無理をするな」自分に言い聞かせた。ホームストレートでストップウォッチを握る二人もサインボードを出しながらつぶやいた。「頼むぞ、ドライバー」。音もなく、風のようにマシンが走り抜けた。最終ラップ、最後の5分が長く感じた。「次はピットに入れ」、周回を間違わないように念のため無線で連絡する。「あれか」「ちがう」、「あれだ」「タイムは」「41分です」、「よし、間に合う」会話が飛び交う。ドライバーはいつもと同じクールな表情でゴールした。

レースは終わった。三人の緊張が解け、撤収作業が始まった。彼らはこれで燃え尽きたわけではない。鈴鹿を走破し、新たな闘志に火がついた。乗ることのない新たなマシンに魂を込めるために。こうして彼らは、いつの間にか一人前のレーサーになっていた。

(4月からの短期間でマシンを完成させることはできません。彼らの乗ったマシンは先輩が残したものです。そして彼らは卒業までの期間、後輩に託す新たなマシンの製作に入ります。)

ドライバー：駒野琢磨、ピットクルー：駒野優季、成瀬治将